

織田武雄監修・中務哲郎訳

『プトレマイオス地理学』

東海大学出版会，1986年5月

A4判 284ページ 25,000円

本書はクラウディオス・プトレマイオスの『ゲオグラフィア』全8巻の完訳である。浩瀚な原著の場合、今回と同様のタイトルを冠しながら、実体は抄訳だったり、要約・紹介の類にすぎないものがありがちだが、これははじめての邦訳であるのみでなく、世界最初の、十分なテキストクリティークをふまえた近代語完訳を称するにたる業績なのである。まず一本の構成を記すと、巻頭に織田武雄教授執筆の「解説」、つづいて原著第I～VIII巻の訳出、末尾に訳注、8000の地名・部族名を主とする索引などのアペンディクス、そして1490年、ローマで出版されたペトルス・デ・トゥレの世界図27枚（A3判大）が補われ、「訳者あとがき」をもって了っている。

さて、原著者および原著については、あまりにも高名であり、そのうえ、長年このテーマを手掛けてこられた織田先生によって、懇切適確に講じつくされているので、いままら付け加えるべき何物も見出せないのだが、自ら勉強し直すつもりで、若干の読書メモを綴ってみたい。

第I巻は「総論」で、地理学と地誌学（コログラフイー）の相違を論ずる。つまり後者がストラボンのごとく、諸地域の特性を、景観を詳細に描写するなどし個別的に記載するのを目的とするのに対し、前者はオイクラーメナーを全一体としてとらえ、諸地域の定位を究極的課題とし、しかもこれらを数学的な線と補助記号によって、図形として表示すべきものであることを説く。もっとも、このいわゆるオイクラーメナーの地図的表現はプトレマイオスの創案にかかるわけではなく、すでにイオニア学派に始まり、2世紀初頭にはテュロスのマリノスが、ヒッパルコスに基づいて幾何学的な経緯線を導入した正角円筒図法をつくりあげていたのであった。事実、第I巻全23章の大部分、即ち第6～20章のあたりは、地球の最大円周、ひいてはオイクラーメナーについてのマリノスの過大な計算や投影法に対する批判に終始しているのである。全くプトレマイオスのマリノスの遺業への依存度は大きく、しかもその修正克服を

通じて、彼自身の「人間の住む世界を球面上での位置と対応させながら平面上に地図化する方法」論が追求されるのである。かくて彼が新たに提示した二つの投影法は、北緯36度で地球に接する円錐を展開した純円錐図法と、擬（または修正）円錐図法とも称すべきものであった。後者では緯線は前者と同じく同心円として表わされるが、経線はメロエ・ロドス・トゥレを通る三つの経線を、正長に分割する円弧として引かれている。

第II～VII巻はオイクラーメナーについての地理的目録で占められるが、それに先立ち第II巻第1章を「各論への序」とし、以下の記載順序が「地図作製のための便宜を宗として」決められたこと、「解説は土地の認識と地図への書き込みに役だつことのみにとどめ」、雑多な旅行報告の類は一切カットするというリゴラスな基本方針がうたわれている。第II巻はヨーロッパ西部、IIIは同じく東部（イタリア～クレタ島）、IVはリビアの10州、Vは大アジア西部（ポントス～バビュロニア）、VIは同じく中部（アッシュリア～ゲドロシア）、そして第VII巻の第4章までに、大アジアのインド、ツナイ人の国、タブロバネを扱い、つづいて第5章は「世界地図の要約」、第6・7章ではオイクラーメナーを含むアーミラリー天球を平面上に作図する方法が説かれる。

このように第II～VII巻の殆んどは地名と経緯度を主とする粛々たる行列であり、これを通覧する根気のある人はまず皆無であろう。さすがにプトレマイオス自身も、上記のように第VII章で「要約」を試み、さらに第VIII巻全体を「要約」として、第1・2章で部分図（ヨーロッパ10枚、リビア4枚、アジア6枚）に理論的根拠を与えたのち、第3章以下ではそれぞれの図の輪郭を、今度は主要地点の「最長（つまり夏至における）昼間時間」と「アレクサンドリアからの時間距離」で示しているが、これがまた延々9ポ2段組8～9ページにわたる地名と数字の羅列なのである。ところで前引の「各論の序」などを読むと、これらの数値が緻密な科学的検討に裏うちされたものであるかのごとく錯覚してしまうが、実は「厩大な数の地理的座標は、路程のデータを経緯度に換算したものであり、このような操作から、ありとあらゆる誤差が発生」しているのだとい

う（『プトレマイオス世界図』解説L. 『パガーニ、竹内啓一訳、岩波書店、1978）。中務氏はこれらの点についても、見逃すことなく訳注を付しており、例えば第Ⅶ巻第15章「リビア第3の地図」のうち、「3. キュレナイカのベレニケ14；15・西へ1；32」（前者は最長昼時間14時間時間15分を、後者はアレクサンドリアからの時間距離を示す）について、「正しくは1：51の筈である」式の補正を、この巻だけでも60か所近くで行っている。

訳注の綿密さ、鋭さは、もちろん、この種の数字のミスの指摘にとどまらない。例えば原著者が第Ⅱ巻第9章ヨーロッパのアプリンカス川の流れを逆の方向に勘違いしていることに対し、「ここでのプトレマイオスは、既存の地図を眼の前に置き、そこに描かれた川の枝分れの様子を、現実の流れの方向は無視して文章で記述しているだけだ、と云えよう」として、同様のミスを他の巻にもわたって数か所指摘している。また地名・部族名などの考証においても、中務氏の（御専門の西洋古典語にかぎらず）語学の素養の広さ深さを垣間見る思いで、羨望に堪えない。

さて、プトレマイオス『地理学』は、同じく彼の筆になり、コペルニクスの転回にいたるまでの宇宙観を支配した天文学書『アルマゲスト』とともに、単なる一科学領域にとどまらず、いわば古代世界の認識体系を構築するものであったが、さらに14・15世紀の西欧におけるその復活、そして大航海時代の幕明けを用意するという、科学思想史上のドラマチックな役割によって、一層、われわれの知的興奮をかきたてるのである。このあたりのまさに世界史的な意義については、織田先生の「解説」所引のA. E. ノルデンシュルツの表白が印象的である。——プトレマイオスの『地理学』は、「コロンブスの新世界の発見よりも強烈に人間の精神を捉えた。新世界ではなく、まさにわれわれの住んでいる世界が1000年間閉ざされていた暗黒から解放された」のである。よく知られているように、幾世紀の間、プトレマイオスの著作は西欧では忘れ去られ、アラブ世界において伝承されていたものが、イタリア人文主義の勃興によるギリシャ語写本探索行の中で発見され、15世紀初め、ヤコボ・アンジェロによってラテン語に完訳されたのであった。その後、この書に関しては豪華に装飾された王侯用のものをはじめ、多くの写本が作成されたし、この世紀の終り頃には印刷術の進歩によって幾種類かの地図とともに、おびただし

い版本がうみだされ、ひろく知識層の間に普及したのであった。

このようなわけで本書の訳出に当たっては、まずどのテキストを底本に選ぶかが問題となるのだが、中務訳では第Ⅰ～Ⅴ巻は C. Müller & C. Th. Fischer, IV巻は F.G. Wilberg & H.F. Grashof, VII巻1～4章は主として L. Renou, それ以降は C.F.A. Nobbe 編のテキストという選択が行われており、目下のところこのような折衷的なやり方がベストなるゆえんが「訳者あとがき」に述べてある。なお、さらに遡ってヤコボの翻訳は原著の本文についてだけだったのか図版も伴うものだったのか、あるいは伝えられた原地図そのものが果たしてプトレマイオス自身の手になるものなのか否かについても諸説があるなど（L. パガーニ）、書誌学的な興味にもこと欠かぬように、プトレマイオス著はできているのである。そのため、「あとがき」にも紹介されているように、従来からラテン語・フランス語・英語等に訳され、また地理学史あるいは古典学などの領域から少なからぬ研究文献が提出されてきたのであった。この間にあって今般の訳業は、前記のごとくテキストクリティークにおいてすぐれ、訳文の確かさは筆者ごとき者にさえ、その精細な訳注からもうかがえるように思うのである。たとえば第Ⅰ巻でいえば、注(3)「スタディオン」、とくに注(94)「クリマ」などは、一編の〈研究ノート〉に展開できそうな内実を備えているし、図3の説明に際し、原文では数字のみで単位を欠いているのに、「2直角を180でなく360としているので正常の度と区別するため‘コマ’という訳語を作り」、ここでの数値の求め方を解説（注128）している例などがこれである。

L. パガーニは「ヤコボ自身、自分の手がける訳業の価値を魂の底から自覚」していたであろうと書いている。当初、中務氏は古典学者として前記のごとき書誌学的感興から出発され、——事実そうであったかも知れないが、訳業の途上においてヤコボの心境を追体験されるにいたったのではあるまいかと密かに想像する。語学的に一言隻句もゆるがせにしないのはむしろのこと、数字や投影法に関しても微塵の誤解もなくプトレマイオスを完全に知りたいという情熱が、中務氏の仕事ぶりに充溢しているのを感じる。たとえば上記の「クリマ」の訳注の中に、「プトレマイオス『地理学』のどこにもクリマ(タ)のシステムを説明していないので」云々という文言

があり、同じく第Ⅱ巻注(3)でも、「このような約束はどこにも明言されていない」とある(傍点筆者)。これだけの大冊を通じて、その件はどこにも出て来ないと、こともなげに明言できるというあたりにも、訳者の原著に対する〈思い入れ〉の深さをうかがうことができよう。ひるがえってわが地理学界の場合、古代に限らず近代地理学の〈古典〉についてさえ、アチラの地理学史の概説書や二次的文献によって安直にものを書くことがほとんどであり、本書に比肩できるような訳業は絶無だったといえるのではあるまいか。「あとがき」の「謝辞」の個所にも記されているように、織田先生が「解説」執筆の他にも、出版社の斡旋など、訳者にさまざまな応援をおしまれなかったのも、ついに地理学の教え子の中からは出現しそくない逸材との邂逅をよるこばれてのことであろうと思う。

そしてこれもまた、顧みてわが身を慨く類に属するのだが、古代そして15・16世紀において、地理学の保持していた権威のなんと偉大だったことだろう。それはプトレイオスの『地理学』が単なる知識の記載ではなく、「知的世界のシステムの中の要素であった」(増田義郎「大航海時代とプトレイオス」、前掲『プトレイオス世界図』所収)ことによるものであることを想起するとき、本書はわれわれに自省を促すことしきりである。(矢守一彦)

福田 徹著

『近世新田とその源流』

古今書院 1986年3月

A5版 311ページ 4,800円

本書は福田 徹の遺稿集である。故人の論文の中から、新田研究としての代表的な論文をとりあげて、この題名の著書にまとめたものである。遺稿を著書にまでまとめて刊行した人々は、小林健太郎・山田安彦・坂口慶治・笠原俊則の四君である。このしごととは故人に対して真摯なる愛情を捧げる人々でなければできないことではない。四君の福田 徹を悼み、彼の成果を学界に公刊した努力に対して、私も讃辞を惜まない。またこの著書に序文を寄せた谷岡武雄の門下生を惜む心情の切々たるものが心に暖く感じてくる。

そもそも遺稿集の刊行というものはむずかしいものである。ただ故人の論文を整理して並べて著書にするだけのことではない。一方には論文を書き残し

た故人の研究課題に対する「考え方と目的」が存在する。他方には故人の遺稿をまとめる人々の「考え方と目的」がある。後者の「考え方と目的」は前者の「考え方と目的」を充分にくみとって、これを第三者の読者が理解できるように編集しなければならないからである。ふつうの著書に対する書評とは異なり、遺稿集の著書に対する書評は、この二つの視点から論評されることが当然であろう。

本書は三部にまとめられている。第一部は近世新田の論文として三か所の事例論文があげられている。第一章は岩木山麓の近世開発、第二章は富士山麓南地域の開発、第三章は宇治市域の新田開発である。第二部は近世新田の地域展開として、東北地方、関東地方、中部地方、近畿地方、伊勢国北部における新田の立地環境として典型的事例となっている新田開発を説述している。第三部は荘園および条里制の復原として、第一章から第四章まで、琵琶湖に注ぐ安曇川下流域の荘園と条里型水田地割を復原し、集落景観・地形環境・土地割・農業景観を説述している。

第一部の諸論文は福田 徹が立命館大学大学院修士課程を1963年に終了した時から、その後の10年間に発表した論文である。第二部は1977年から1984年まで、2～3年間隔で地方ごとに新田開発をまとめた論文であり、この間隔は調査期間を意味していると思われる。第三部の論文は1973年から1981年ころまでに発表したものであり、近世新田の源流を荘園・条里型水田に求めていく福田 徹の考え型が強まっていったことを推察させるものである。第一部の新田開発の三つの事例研究は、福田 徹が「近世新田の構造」——このテーマは編集者がつけたものであろう——という視点を主張しているかの如く、編集者がうけとめて表現したことは、故人の「方法と目的」について誤っているものではないと思われる。序文を寄せた谷岡武雄が新田の「立地環境の如何によってそのあり方が異なることに注目した」と指摘しているが、まさにその通りであり、新田そのものだけの解明にとどめず、新田をめぐる環境にまで検討している。第二部の各地方における新田の典型的事例を多く説述していくが、すべてこの観点において強調している。地方別の新田開発の検討は、東北地方から近畿地方までしか掲載されていないが、その他の中国・四国・九州地方については、これから検討して論文として発表する計画であったと思われる。